

「よしや。命だに」の解釈

—光源氏と葵の上の関係—

池 田 節 子

The Interpretation of “Yoshiya. Inochi-dani”

—The Relationship between Hikaru Genji and Aoi-no-ue—

Setsuko IKEDA

一 はじめに

若紫巻において、北山から帰京した光源氏は、左大臣に連れられて左大臣邸に行く。しかし、葵の上とは不和で、源氏は北山で発見した紫の上のことを思う。この場面における、源氏の葵の上に対する最後の言葉、「命だに」の解釈が未だ定まっていない。新編日本古典文学全集の頭注^{二二}には、「『命だに』に心になふものならば何かは人を恨みしもせむ（奥人）を引くとするが、やや不審（若紫^{二二}）とある。現代語訳には「せめて『命だに』とあるが、これでは、源氏が何を言おうとしているのか不明である。『命だに』のあとに、源氏が言葉にはしな

かったものの、葵の上に訴えたかったことがあると思われる。それが何であったか、「やや不審」とされる「命だに」の解釈について、本稿では考えていきたい。

適当な引歌を発見できないことが、解釈の障害になっている。この箇所 of 妥当な解釈に辿りつくためには、「よしや」と「命だに」の語意や用例の検討だけではなく、源氏と葵の上の関係を検討しなくてはならないように思われる。

二 古注釈から現在に至る解釈

該当箇所を少し長くなるが引用したい。葵の上がはじめて具体的に描かれる場面である。

A 女君、例の、這ひ隠れてとみにも出でたまはぬを、大臣切に聞こえたまひて、からうじて渡りたまへり。ただ、絵に描きたるものの姫君のやうにしすゑられて、うちみじろきたまふこともかたく、うるはしうてものしたまへば、思ふこともうちかすめ、山路の物語をも聞こえむ、言ふかひありてをかしううち答へたまはこそあはれならめ、世には心もとけず、¹うとく恥づかしきもの²に思して、年の重なるに添へて、御心の隔てもまさるを、いと苦しく思はずに、³「時々³は世の常なる御気色を見ばや。たへがたうわづらひはべりしをも、いかがとだに問ひたまはぬこそめづらしからぬことなれど、なほ恨めしう」と聞こえたまふ。からうじて、「問はぬはつらきものにやあらん」と、後目に見おこせたまへるまみ、いと恥づかしげに、⁴気高ううつくしげなる御容貌なり。「まれまればあさましの御言や。問はぬなどいふ際は異にこそはべるなれ。心憂くものたまひなすかな。世とともにはしたなき御もてなしを、もし思しなほるをりもやと、とぞまかうざまにこころみきこゆるほど、いとど思しうとむなめりかし。よしや。命だに」とて、夜の御座に入りたまひぬ。女君ふとも入りたまはず、聞こえわづらひたまひて、うち嘆きて臥したまへるも、なま心づきなきにやあらむ、ねぶたげにもてなして、とかう世を思し乱るること多かり。(若紫一 226～227)

古注から見てもよい。「河海抄」・「細流抄」・「岷江入楚」は、「奥入」の引歌「命だに心になふものならば何かは人を恨みしもせむ」を引用するのみであるが、「孟津抄」は、「葵の心もなをりせんとなり」と記して右の歌をあげ、「此哥可叶也」とし、そのうえで「えぞ知らぬ今心みよ命あらば、われや忘るる人やとはぬと」(古今集・離別歌・三七七、読入しらず²)をあげる。

本居宣長『源氏物語玉の御櫛』は、「これはよしや命だにながらへてあらば、我こ、ろざしの浅きにはあらざるほどの、おのづからしらるべし、といふ意の引歌あるべし」とし、島津久基『源氏物語講話』が支持する。

萩原広道『源氏物語評釈』は、「いかにしてしばし忘れん命だにあらばあふよのありもこそすれ」(拾遺集・恋一・六四六、読入しらず)と「孟津抄」のあげる「えぞ知らぬ」の歌をあげ、「旧注の引歌はひがことなること余滴にいへるがごとしさてこゝの意はよしや命だにあらば我やわする、人やとはぬといふことをつひには思ひ弁まへ給ふを見んといふ意也」とする。

現在通用している注釈書を見ると、玉上琢弥『源氏物語評釈』は、「ええ、も、長生きさえできれば(いつかお考え直しもあるう)」と現代語訳する。源氏の葵の上に対する言葉「もし思しなほるをりもや」(波線部)から補ったのであろうが、「考え直す」には理由が必要であろう。萩原広道『源氏物語評釈』は、長生きしていれば、どちらの思いが長続きするかがわかって考え直すであろうと解釈しているが(「孟津抄」も、二首目の引歌から推して同様の解釈であろう)、玉上琢弥は、『奥入』

の引歌を挙げるので、「考え直す」理由は別になる。玉上琢弥は、『奥入』のあげる引歌を「寿命だけでも思うままになるのだったら、どうして人を恨んだりしようか、いつかは恨みもとけるはず」と解釈しているのので、「考え直す」とは「恨みがとける」ということらしいが、依然として「考え直す」理由は不明のままである。

ところで、『奥入』の歌はどのような意味であろうか。「寿命だけでも思うままになるのなら、人を恨んだりほしくない。命さえあれば、ほかのことはどうでもいい、何も望まない」の意ではなからうか。^③玉上琢弥『源氏物語評釈』の注にある「これ以上言ってもむだだ、という気持ちでこう言ったのだ」という解釈は首肯できる。しかし、歌の解釈を、玉上琢弥の解釈ではなく、「命さえあればほかはどうでもいい（あなたに愛されなくてもいい）」とすると、強烈な捨てぜりふになる。やはり、島津久基などの述べる通り、この歌は引歌としてふさわしくはないようだ。『孟津抄』・萩原広道『源氏物語評釈』のあげる引歌は、女が男に贈ったもので、源氏が葵の上に訴えているこの場面とは状況が異なるので、やはりふさわしくないように思われる。

新潮日本古典集成は「仕方ない、命さえ長らえていれば（私の気持ちもいつかはお分りいただけよう）。引歌があるうが、明らかでない」とする。これは、本居宣長の説であろう。但し、宣長は、「よしや」を「たとえ。仮に」の意で解釈している（広道も同様）。新日本古典文学大系には、「ええままよ、『命なりとながらえるならば』ですよ。引歌があるう」とあるが、命がながらえるとうなるのかについては言及がない。また、新潮日本古典集成と新日本古典文学大系は『奥入』の引歌を引

用していない。

本居宣長の説はいかにもふさわしいように思われるのだが、新潮日本古典集成が受け継ぐだけである。引歌が見つからないので、「よしや命だに」の解釈としては飛躍しすぎているということなのであろうか。次節以下で、宣長説がこの箇所解釈としてふさわしいと考えられることを証明していきたい。

三 「よしや」と「命だに」の、平安和歌および『源氏物語』における用例

「よしや」は、「①ままよ。どうなろうとも。②（逆説の仮定条件を表す表現と呼応して）たとえ。仮に」^④の意である。この語は、『源氏物語』には当該箇所一例のみであり、『新編国歌大観CD-ROM』によって検索しても、『源氏物語』と同時代までの歌で、①の意で用いられた歌は七首ほどである。勅撰集は一首のみであるが、それは、『古今和歌集』恋五の巻末歌、

流れては妹背の山のなかに落つる吉野の河のよしや世の中

（古今集・恋五・八二八、読入しらず）

である。ほかには、右の歌を本歌にする『蜻蛉日記』の歌が一首、「よしや世の中」で終わる歌が一首（古今六帖・二一〇八）ある。「よしや世の中」というフレーズは類歌を生じそうに見えるが、類歌はほとんどない。つまり、「ままよ」の意の「よしや」はありふれた表現ではないのではないか。宣長や広道は語意②で解釈している。「ままよ」という意は、八二八番歌によって、私たちには身近に感じられる語意なの

ではなからうか。引歌とまではいえないとしても、当該箇所を解釈するにあたっては、八二八番歌を念頭におく必要があるであらう。「ああ、夫婦関係はめんどろだ、どうなったっていいさ」という源氏の気持ちが籠められていると解釈できよう。

続いて、「命だに」について考察したい。この語も、「よしや」と同様、『源氏物語』において一例のみである。同時代までの和歌を『新編国歌大観CD-ROM』によって検索すると、一四首（勅撰集二首）ほどある。それらは「命だに心になかふ」・「命だにあらば」とあるものが多い。しかし、

命だにたえぬばかりしみなれ草うきにただよふことはことわり

（匡衡集・五六）

という歌もある。「よしや。命だに」も、「命だに絶えなば」(死んでしまえば)の可能性もなくはないといえよう。

では、『源氏物語』において、「命」は、どのような語と連続し、どのような意味で用いられているのであろうか。「命」は、『源氏物語』に一九九例ある。その用法は多岐にわたるが、命は思いのままにならない、明日をも知れない・はかない、長生きする、命が延びるほどにすばらしい、といった場合が多いようだ。寿命が尽きなくて困る、惜しくない命といった例は多いが、いっそのこと死んでしまいたい、死んだ方がまし、(比喩的に)死にそうだ、といった例は見当たらない。⁽⁶⁾概して、命の継続、命への執着をいうものが多いように思われる。「よしや。命だに」は、「命だに長らへば」・「命だにあらば」などの「あらば」・「ながらへば」などが省略されたものと見るのが、やはり適当で

あらう。しかし、言いさした感じが特に強い表現ではある。

以上の検討から、「よしや。命だに」はあまり例のない表現で、特に「命だに」は不完全な言い方であると指摘できよう。⁽⁷⁾それは、源氏のいらだちを表現してもいよう。源氏の発言には、概して持って回ったような厭味な言い方が多いように思われるので、こうしたつっけんどんな言い方は注意される。この場面には、「まれまれはあさましの御言や」など、ストレートで冷淡な葵の上批判もある。父左大臣の力を背景に尊大にふるまう葵の上と、彼女に対してそれほど魅力を感じてはいないが尊重せざるを得ない源氏の、独特の関係が如実に描写されているといえよう。

四 源氏の葵の上観

前節までで検討した語意や用例からでは、「よしや。命だに」の解釈の確証は得られない。そこで、源氏が葵の上をどのように見ているかを検討することにした。

B …心うつくしく例の人のやうに恨みのたまはば、我もうらなくうち語りて慰めきこえてんものを、²思はずにのみとりないたまふ心づきなさに、³さもあるまじきさびごととも出で来るぞかし、人の御ありさまの、⁵かたほに、そのことの飽かぬとおぼゆる疵もなし、人よりさきに見たてまつりそめてしかば、あはれにやむごとなく思ひきこゆる心をも知りましたまはぬほどこそあらめ、⁶つひには思しなほされなむと、おだしく軽々しからぬ御心のほどもおのづからと、頼まるる方はことなりけり。(紅葉賀一 316)

C 内裏より、大殿にまでたまへれば、例の、うるはしうよそほし

き御さまにて、心うつくしき御気色もなく苦しければ、「今年よりだに、すこし世づきてあらためたまふ御心見えば、いかにうれしからむ」など聞こえたまへど、わざと人すゑてかしづきたまふと聞きたまひしよりは、やむごとく思し定めたることにこそはと心のみおかれて、いと疎く恥づかしく思さるべし、(中略) 四年ばかりがこのかみにおはすれば、うちすくし恥づかしげに、盛りにととのほりて見えたまふ。⁵何ごとかはこの人の飽かぬところは

322-323

D 殿におはし着きて、つゆまどろまれたまはず、年ごろの御ありさ

まを思し出でつつ、などて、つひにはおのづから見なほしたまひてむとのどかに思ひて、なほざりのすさびにつけても、つらしとおぼえられたてまつりけむ、世を経て疎く恥づかしきものに思ひて過ぎはてたまひぬる、など悔しきこと多く思しつづけらるれど、かひなし。(葵二48)

A・B・C・Dの引用文は内容がそれぞれ重なり合っている。

A「世の常なる御気色を見ばや」、B「例の人のやうに」、C「世づきてあらためたまふ」(各傍線3)と、普通の女のようにしてほしいという源氏の葵の上への要求がある。また、B「そのことの飽かぬとおぼゆる疵もなし」、C「何ごとかはこの人の飽かぬところはものしたまふ」(各傍線5)という源氏の葵の上に対する評価が繰り返される。「飽かぬところがない」とはマイナス点がないということで、高い評価で

はあるが、積極的に魅力を感じることではなからう。そして、葵の上が源氏を「うとく恥づかしきもの」(各傍線1)に思っているということがA・C・Dに、源氏が葵の上を「恥づかしげ」(各傍線4)だと見ていることがA・Cにある。このほか、「思はずに」(各傍線2)がA・Bに、「おのづから」がB・D(各傍線6)にある。

以上のことを念頭にB引用文を見ると、「あはれにやむごとく思ひきこゆる心をも知りたまはぬほどこそあらめ、つひには思しなほされなむ」(二重傍線部)とある。自分の気持ちを長い夫婦生活の末には葵の上が理解して、自分は思い直されることにきつとなるだろうと源氏は思う。これは、A引用文「よしや。命だに」のあとに続くはずだった内容に重なるのではないか。A引用文には「もし思しなほるをりもや」(波線部)ともある。また、D引用文には、「つひにはおのづから見なほしたまひてむとのどかに思ひて」(二重傍線部)とある。葵の上が、政略結婚した正妻で離別することのない妻であるために、「つひには」(しまいには)という思いの強かったことが、繰り返し源氏から語られていることになる。A引用文の「よしや。命だに」もそのように理解できるのではないか。「よしや。命だに」には、「命だに(あらば)」、「つひには」、「あはれにやむごとく思ひきこゆる心」を葵の上が理解して、自分のことを「おのづから見なほ」すであろうという「のどか」な気持が、離別できないいらだちとともに籠められているのではなからうか。本居宣長の解釈が正鵠を得ていることが、源氏と葵の上の関係を辿ることによって明らかになってくる。但し、ほかの箇所では、「命」という語がなく、「よしや。命だに」が特異であることは否めない。引

歌が必要とされるゆえんである。葵の上が早死することの伏線にもなっている。「命だに」続けば葵の上から理解されたものを、理解してもらえずじまいになってしまったのである。

四 葵の上と紫の上

前節において、葵の上が源氏のことを「うとく恥づかしきもの」に思っていたことがA・C・Dにあることを指摘した。源氏が葵の上を「恥づかしげ」と見ていること(A・C)も指摘した。「恥づかし」「恥づかしげ」は、相手をすばらしいと称賛しつつも、相手との間に断絶を感じる時に用いられる言葉である。⁸⁾これらは、葵の上と源氏の関係を表すキーワードであるといえようが、実は両者だけではなく、紫の上をも巻き込んだ人間関係を表現する語なのである。

ものよりおはすれば、まづ出でむかひて、あはれにうち語らひ、御懷に入りゐて、いささかうとく恥づかしと思ひたらず。

(若紫 261)

葵の上が源氏を終始「うとく恥づかし」と思い続けたのに対して、紫の上は、「うとく恥づかし」とは思わない。「ものよりおはすれば、まづ出でむかひて、あはれにうち語らひ」(破線部)は、A引用文の葵の上の描写、例の、這ひ隠れてとみにも出でたまはぬを・「言ふかひありてをかしうち答へたまはばこそあはれならめ」(破線部)の逆である。北山で発見した新しい女君・紫の上が、源氏に対して葵の上とは正反対の態度をとる女君であることが示されている。なお、「うとく恥づかし」は、『源氏物語』全体でこの四例のみで、源氏・葵の上・紫の

上の人間関係を示す固有の連語である。⁹⁾

ところで、紫の上と葵の上の対応は言葉上のものだけではなく、葵の上の死に至るまで、葵の上に対する不満から紫の上への執着が深まるという物語進行のパターンが繰り返されている。A引用文に続いて「この若草の生ひ出でむほどのなほゆかしきを」(若紫 227)と、源氏は紫の上への執着を深める。B引用文は、紫の上を引き取ったという評判を聞いて葵の上が不快に思っている場面であり、引用文に続いて「幼き人は、見ついたまふままに、いとよき心ざま容貌にて」(紅葉賀 317)と続く。C引用文の前には、雛遊びに興じる紫の上が描かれ、二人の関係を「世づかぬ御添臥」とする(同 319-322)。C引用文傍線3「世づきてあらためたまふ…」との対比が見られる。このほか、若紫巻第一巻二五二頁から二五二頁においても、葵の上との不和と紫の上への執着が接して描かれている。また、花宴巻第一巻三六一頁にも「人馴れたる」紫の上に対して「ふとも対面したまはず」の葵の上の接して描かれている。

『源氏物語』には、光源氏を中心とした放射状の女性関係が描かれているが、それと同時に、紫の上を中心とする女君たちの放射状の対比関係もあると思われる。紫の上と藤壺、紫の上と女三の宮という紫のゆかりの女君たちだけではなく、紫の上と末摘花、紫の上と明石の君、紫の上と朝顔の姫君、紫の上と雲居雁…と、『源氏物語』の女君たちは、紫の上を中心に関係づけられていると思われる。紫の上と葵の上が、相接して正反対の性格を帯びて物語に登場していることから、紫の上を中心として女君を配置するという物語の構成は、物語の初期

から採られていることがうかがえよう。

さて、本稿で問題にした「よしや。命だに」は、正妻で別離がない関係であるがゆえの、そのうちなんとかなるといふ源氏の思いを表していた。葵の上は「つひには」の女君である。一方、紫の上は、後見を持たず子もない、源氏との関係がすべてという女君である。左大臣家を背にする葵の上とは正反対である。その紫の上はどういう女君であるかといえ、瞬間瞬間を生きる女君であると思われる。ずっと先の若菜上巻で、紫の上は源氏に次のように思われている。

去年より今年はまさり、昨日より今日はめづらしく、常に目馴れぬさまのしたまへるを、いかでかくしもありけむと思す。

(若菜四89)

紫の上の魅力は日々更新され、源氏は引きつけられ続ける。この点においても、両者は対比的な女君であるといえよう。

五 終わりに

『源氏物語』の研究史は長く、それだけにいろいろな説が出され、中には正反対と思われるような説さえ存在する。また、その時代時代の思想による偏向が加えられていると思われるものもある。とはいえ、本稿で扱った「よしや。命だに」のように、語釈のレベルで解釈が定まっていない箇所も多々ある。微々たる問題のように思われるかもしれないが、細部の見直しによって、『源氏物語』全体の解釈が見直されることもあるであろう。本稿では、「よしや。命だに」が葵の上の独自性を示しており、それが、紫の上との重要な対比点であることを述

べた。難読箇所を読み込むことの積み重ねによって、『源氏物語』の解釈が深まっていくであろう。演習の授業などで、未だ解釈の定まらない箇所につづかることがある。索引などを駆使しつつ、物語全体を見渡して、妥当な解釈に近づいていきたいと思う。

注

1 引用は、新編日本古典文学全集による。漢数字は巻数、算用数字は頁数を示す。

2 歌の引用は、『新編国歌大観』による。漢字表記に改めた箇所がある。

3 校正の段階で、「命さえ望み通りになるのなら、死んでしまいたい。そうなれば、どうして人を恨むことになろうか、なりはしない」と解釈することもできると気がついた。とはいえ、ますます引歌として不適合になる。

4 『全訳全解古語辞典』(文英堂、山口堯二・鈴木日出男編)

5 角川古典大観CD-ROM『源氏物語』による。

6 柏木巻冒頭の柏木の心内語「あながちにこの世に離れがたく惜しみとどめまほしき身かは」(四289)ぐらいであろうか。

7 よく似た例として、匂宮の中の君への言葉、「たはやすく言出づべきことにもあらねば、命のみこそ」(宿木五410)があげられる。この箇所も、「命のみこそ」の後に省略されたものが明らかではない。長生きして、自分の心ざしを見届けよというほどの意であろう。

8 拙稿「同語反復表現」(『源氏物語表現論』風間書房、二〇〇〇年)
9 注8と同じ。